

## [父の思い出がつなぐ戦争と平和]

私の父はピースサインが嫌いだった。若い世代の人たちが、写真の際、当たり前のように指で作る、あのVサインのことだ。

私の若いころには、まだその“習慣”、あるいは“慣習”はなかったし知らなかった。なので、1976年に日本を離れた私自身は、一度も「ピースサイン」をやったことがない。ヨーロッパの人たちの間でも見たことはない。いったいこれ、日本ではいつから始まり、流行りだしたのだろうと、ふと興味を持った。

時代的には、やはり1970年代だそうだ。そして始まりは、ベトナム戦争におけるアメリカ兵、と聞いた。もしかしたら日本には、反戦歌を歌った“ヒッピー”の人々が「平和」を願ったしるしとして、歌とともにアメリカから入ってきたのかもしれない。

父は第二次世界大戦の折、南方戦線に行っていて、インドネシアで終戦を迎え、捕虜生活を送った。ただ、オランダ語を学んでいた父は、いわゆる「捕虜」にはなったものの、通訳のような形で優遇されていたらしい。それゆえ、その後の人生を通じて、インドネシアとの繋がりは大きな役割を持っていたようだ。インドネシア人の友人も多く、今でもアジア各国で愛される「ブンガワン・ソロ」という歌を作った、ゲサンさんとも交流があった。「著作権」と言う言葉とは無縁の国。この歌が日本でどんなに流行っても、とても貧しい暮らしをしていたゲサンさん。彼のために立ち上がった多くの日本人の仲間に、父も入れていただいていた。

なぜ父と「ピースサイン」？ そしてなぜそれが嫌いなの？ それは、第二次世界大戦後に、南方でアメリカ兵が輝く笑顔とともに、Vサインを「ヴィクトリー」のV、つまり「勝利」のシンボルとして手で示したことを思い出すから、と言っていた。そうか、父にとっては「ピースサイン」は平和ではなく、「ヴィクトリーサイン」だったのだ。

ベトナム戦争というと、忘れられないことがある。

小学生のころ、4歳年上のハーフの男の子が、同学年にいた。なぜ彼が4歳年上なのかなど、誰も不思議に思わず、運動会では“スター”だった彼は、むしろ皆の憧れの存在だった。私も実はその一員だった。小学校卒業以来、彼に会ったことはなかった。私は都立駒場高校の音楽科に通っていた。17歳のある日、歌の個人レッスンに出かけ

ようと家の門を出た時、通りかかった一人の高校生と目が合った。

5年ぶりだった。

「今日ここを通ったら、もしかしたら君に会えるかと思って」

驚いた私の耳に響いた次の言葉は、「昨日、アカガミが来た」。

世界が真っ暗になったような気がした。ベトナム戦争末期のころだった。

アカガミ。なぜ彼がその単語を使ったのか、今でもわからない。

もしかしたら、“その前の戦争”の後、日本で生まれた彼は、ほかに単語が思いつかなかったのかもしれない。今、アカガミという単語を

知っている人、理解できる人は、日本にどのくらいいるだろうか。

彼はずっとアメリカ国籍だったのだ。それゆえ、二十歳になって「徴兵の書類」が来た。彼自身にとってもものすごくショックなそのことを、誰かに

話したかった。そしてふと、私の家の前を通ってみたのだと言う。

唯一の救いは、彼がまだ学生だったこと。高校卒業までは徴兵を猶予してくれるらしい、でもその後は、「黒人や混血は、一番に前線に送られるだろう」との彼の言葉を、今でもそのまま覚えている。

生まれて初めて「戦争」を意識し、身近に感じた瞬間だった。

幸いなことに、彼は徴兵されずに済んだらしい。そして今ではサイパンで幸せに暮らしていると人づてに聞いた。本当に、本当に嬉しい。

戦争を思い出すもう一人の友だち、ラディ。

1976年の夏に、ドイツの語学学校で一緒だったイスラエル人の彼。

私は9月半ばに語学学校を離れてベルリンに行ったが、ラディは祖国に戻ったのだろう。その後、何度か(ドイツ語で!)文通した。忙しさに返事がなかなか書けないでいると、「ユミコ、どうしたの? 元気なの?」

と次の葉書が来た。いつも同じ場所から送られてくるわけではなかった。

私からの葉書は、きっとイエルサレムの住所から転送されて、彼のもと、おそらく戦場へ届けられていたのだろう。そうしているうちに、ある時、私の葉書が宛先不明で戻ってきた。再度何回か試みたが、やはりだめだった。

電話番号は知らなかったし、今の時代のようにメールやSNSなんて言うものは存在しない。郵便は“片道”1週間ほどかかる。消息を調べる“つて”もなく、諦めるほかはなかった。でも、彼が関わったはずの中東戦争では、1979年には最終的に「エジプト — イスラエル平和条約」が締結されたはずだ。届かないのは郵便事情のせい、と信じたい。生きていてほしい。

家に無事に戻ったかもしれないが、今になっては、もう元の住所も手元になくなってしまった。ジャネットという、愛らしい奥さんもいたが、彼らのことはいつも心のどこかに引っかかっている、時折そのころの思い出が

浮かび上がってくる。

イスラエルには、2度訪れた。一度目は1998年。泊まっていたホテルのTVで長野オリンピックを見た。観光客も多く、一見、平和に見えた。死海に浮かんでもみた。様々な問題を起こしたマサダでは、その前に読んだジェームズ・ミチナー著の「泉」を思いながら、アラブ、パレスチナ、ユダヤ問題の複雑さを思った。

どうして、ラディの行方を尋ねてみななかったのか？ 一見平和に見えたその土地で、そこそこに、多くの緊張感を感じ取ってもいたからだ。当地の担当者に、ラディについて、なんと説明すればいいものか。なにしろ、その国の「軍関係者」に知り合いがいると言うだけで、状況が正確ではっきり「無害」とわかるまでは、隔離にも近い形で動けなくなるのだ。街を散歩していると、ふいに銃を構えた兵士に出くわす。気をつけて見回すと、道の角っことや家々の屋根の上に、何人もの兵士たちが“待機”していた。万が一「何か」が起こったら、すぐに対応できるためである。そんな雰囲気には慣れない私は、なんだかドキドキするばかり。でも、人間の感覚とは恐ろしいものだ。2年後に同じところを再度訪れ、同じように街のそこそこで銃を構えた兵士に出会うと、初めての時には緊張感でドキドキだったのに、今度は安心感に浸されたのだから…。

父の遺品を整理していた時、「サランガンの思い出」という、ワープロ書きのメモが見つかった。サランガンとは、ジャワ中部の避暑地の地名とのこと。第2次世界大戦前に商社の仕事で訪れた時の、スイスのサン・モリッツにも似た美しさは格別だったらしい。亜熱帯の自然と湖、絵葉書にできる街並み、そこでは馬に乗る観光客が散策。

そして2回目は戦争中。オランダ軍の捕虜になったドイツ軍の家族を、日本軍がサランガンに収容した。最後は1994年。なつかしさに駆られて訪れたかつての美しい町は、インドネシアの「普通の田舎町」になっていた、とあった。オランダの植民地であった町が戦場となり、戦後は、その国の人々が自力で平和の歴史を紡いでいった、ということなのかもしれない。